



## 漱石のエルド

夏目漱石は、数々の名作を残し、日本人が最も愛する作家の一人です。

英文学者だった漱石の文章は美しく、だれもが親しみ、若い人びとに愛されています。漱石は、倫理感の強い芸術家でした。常に自己批判をしながら、人間の生きる道を考え続けました。

一八六七年、夏目家に八番めの子が生まれました。この赤ん坊が、漱石、夏目金之助でした。

夏目家の兄、大一是英語が得意でした。金之助は、漢文が大好きでした。大一是金之助に英語の勉強をすすめ、毎日時間を決めて教えてくれました。兄は、「これからは間違はなく英語の時代になる。西洋文明は、英語が分からなければ正しく理解することはできない。第一、大学に入るなら、英語は欠かせない。」と言いました。

ある日、兄の大一が仕事から戻つてくると、玄関口で、金之助が古本屋に本を売り渡しているところでした。おびたらしい数の本が、山積みになっています。「おいおい、一体どうする気だい？」

「はい、好きな漢文の本がそばにあると、気になって英語に身がはいりませんから、みんな売ってしまうことにしました。これで心を落ちつけて英語の勉強ができます。」と、金之助は答えました。

大一是、弟の思い切りの良さに胸が熱くなりました。強い決意をもって、一生懸命英語の勉強をしたので、金之助は、望み通り大学予備門今の東京大学教養学部)に入ることができました。

金之助は、住みこみで塾の先生をしました。彼は、まじめに働き、勉強して、成績はぐんぐんあがり、卒業するまでずっと首席で通しました。

金之助の友だちが、実家によく遊びに来ました。何人か友だちが集まると、将来の希望や、選ぶ学科のことが話題になります。金之助は、いろいろ考えたすえ、建築科へいこうと決心していました。ところが、友だちの米山保三郎に大反対されてしまいました。

「自分だけの生活のことを考えるなんて、君らしくないよ。人間の生活なんてちっぽけなものだ。君は得意な文学を選ぶべきだ。いい文学作品なら、ずっと人びとの心に生きつづけるじゃないか。」金之助は、米山の言葉に心を打たれました。ほんとうはなによりも文学の好きな金之助です。少年の頃から小説家になりたいと思っていたほどです。「本当は、ぼくも文学をやりたいと思っていたのだ。ありがとう、なんだか勇気が出てきた。」

こうして、小説家になる決心をした金之助は、英文科に進みイギリスやアメリカの文学の勉強を

はじめました。そのころ金之助は、漱石という名をペンネームにしました。「がんこもの」「へそまがり」という意味です。

『吾輩は猫である』という、人間や社会を猫の目から見て批評した愉快な作品が評判になると、金之助は、大変喜びました。小説家としてやっていける自信を得たからです。小説家としての出発は、遅かったのですが、スタートを切ってから、『坊っちゃん』『倫敦塔』

『虞美人草』『二四郎』『それから』『こころ』『道草』などの名作を、相次いで生み出しました。夏目漱石の名は、すごい勢いで日本中に広まっていきました。大正五年に金之助は亡くなりましたが、数かずの作品は、漱石の名とともに生きつづけています。

### 児童生徒に伝え、考えさせたいこと

- ◎ 自分の夢と希望をもつ。
- ◎ 友だちや家族の助言を大切に、冷静に自分の進路・職業を決める。
- ◎ 努力し夢を実現する。

#### ○ 「漱石」の名前の由来

故事「漱石枕流」は、負け惜しみの強いことなどを意味します。中国西晋の孫楚は「石に枕し流れに漱ぐ」と言うべきところを、「石に漱ぎ流れに枕す」と言ってしまうしました。誤りを指摘されると、「石に漱ぐのは歯を磨くため、流れに枕するのは耳を洗うためだ」と言ったそうです。

## 資料 漱石誕生の地



### 黒い御影石製の 生誕 100 年記念碑

(昭和 41 年 2 月 9 日)

漱石は 慶応 3 年 1867 年 1 月 5 日 牛込馬場下横町に生まれました。現在名は喜久井町 1 番地。喜久井町は夏目家の紋章（井げたに菊）にちなみます。

### 「夏目漱石誕生の地」

と刻まれています。

文字は遺弟子  
阿倍能成氏の揮号



山房の記録写真

左手に芭蕉の大きな葉がみえます。

## 漱石山房(そうせきさんぼう)

夏目漱石は、明治四〇年九月、早稲田南町に引越しました。朝日新聞に専属小説記者として入社して半年、第一作「虞美人草」を書き上げた頃のことです。漱石は、ここで十年間、多くの名作『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『こゝろ』などを生み出し、大正五年、四九歳で「明暗」の執筆中に亡くなるまで住みました。漱石が晩年を過ごしたこの家と地を「漱石山房」といいます。

「漱石山房」は、ペランダ式回廊のある広い家で、庭には背たけを越す芭蕉がそよぎ、とくさが繁っていました。前所有者は医者で、奥の十畳は板敷きの洋間で診察室として使われたそうです。漱石はこの洋間に絨毯を敷き、紫檀の机を置いて書斎として使いました。

机は意外に小さくて、漱石が小柄であったことと関係するようです。書斎手前の十畳が応接間でした。漱石には、門下生や新聞関係者など、

面会者がとても多かったので、面会日を毎週木曜日に決めて午後から

応接間を開放し、訪問者を受け入れました。これが「木曜会」の始まりでした。「木曜会」は、近代日本では珍しい文豪サロンとして、若い文学

者たちの集いの場所となり、漱石没後も彼らの精神的な砦となりました。



新宿歴史博物館展示 漱石山房復元模型  
右端が漱石の書斎・すぐ左の部屋が応接間

下は公園内に復元された山房の回廊



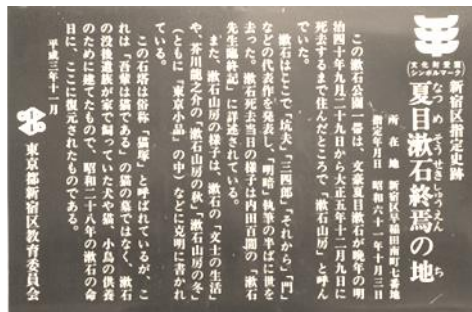
富永直樹作（平成3年建立）  
碑面には『則天去私』の碑文があります。

### 木曜会のメンバー

森鷗外・鈴木三重吉・寺田寅彦・阿部  
次郎・安倍能成・芥川龍之介・久米正雄・  
松岡譲・菊池寛・武者小路実篤・内田  
百閒・有島武郎 ほか

### 則天去私

エゴを超越して、自然の叡智に従って  
生きるという理想を掲げました。







### 道草庵

道草庵では漱石や漱石山房に関するパネルを展示しています。区では、「道草をするように、みなさまどうぞお気軽にお立ち寄りください」と広報しています。



### 展示物

漱石宅の回廊図や復刻された資料等が所狭しと展示され、とても楽しめるスペースになっています。

### 猫塚

我が輩は猫であるの猫のお墓ではありません。石せん。昭和二八年に復元された塚です。石塔は漱石が亡くなった後に遺族が家で飼っていた犬、猫、小鳥の供養のために建てたものです。それが猫塚として有名になりました。



漱石山房にあった芭蕉は、バショウ科バショウ属の多年草です。草は、三、四メートルにもなり見上げるほどの高さになります。

葉は大きく破れやすいのですが、最近では観賞用として育てられています。葉を乾燥させたものを生薬でも「芭蕉」といい、利尿・解熱の薬効があるそうです。(下左の写真は漱石公園に植栽された芭蕉)

江戸時代、シーボルトが、この芭蕉を「ムサ・バショウ」という学名で発表しました。「ムサ」とはバナナの仲間を意味する学名で、その後、イギリスでは、芭蕉のことをジャパニーズ・バナナと呼んでいました(実際バナナに似た小さな実が付きます)。

江戸時代の俳人松尾芭蕉は、深川の自宅の庭にあった芭蕉から、自分の名前を芭蕉としたそうです。



バナナに似た実がなる



## 虞美人草



明治41年発刊



早稲田小学校  
の漱石文庫

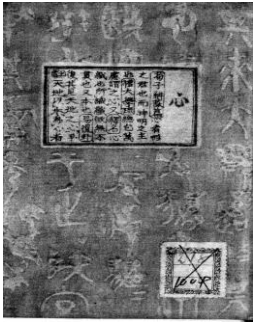
夏目漱石は、この本が発行された明治四一年（一九〇八年）には、すでに大流行作家でした。「虞美人草」だけではなく、夏目漱石の小説は、いずれも装丁がすばらしいことで知られています。特にこの本ほど贅沢な造本は他にないと言われています。

漱石の作品を出版するときは、著名な図案家や画家の作品を惜しげもなく装丁に使用しています。虞美人草は菊判上製帙（ちっ）入りです。帙（ちっ）というのは、本来、和とじ本を何冊かまとめて保存することが目的のものです。書物の損傷を防ぐために包む覆いで、厚紙を芯（しん）とし、表に布をはって作ります。帙（ちっ）は手作りなので大量生産は効きません。書物に目を通すことを繻（ひも）くというのは、帙（ちっ）の紐（ひも）を解くことに由来しています。

明治・大正・昭和時代、書物は知識の泉として、大変貴重な扱いを受けました。作る方も読む方も決して粗末に扱ったりはしませんでした。後の世まで残され読まれることを考えて、堅牢（けんろう）に作りしました。様々な技術と創造力を駆使した工芸品でもあります。価値が高いからこそ書棚に並べたいし、手放したくもないのです。

現在のように、読み捨てを予想して作られた本、読めればいいだけのe-ブックにはない堅実な思想です。

ちなみに「こころ」（一九一四年）の装丁などは、漱石自身が行いました。



こころ

「こころ」の本は、序文・表紙・題字・みかえし・とびら・おくづけ・朱印・検印・箱の全部を私が執筆、考案しました。

